

智頭町第7次総合計画進行管理結果

令和2(2020)年度事業

令和3(2021)年6月

企画課

## 1 目的

第7次智頭町総合計画を推進するため、総合計画に記載されている基本計画について進行管理を適切に行うための仕組みを構築し、それぞれの所管課においても計画の進捗状況を管理する。

また、令和元(2019)年7月1日に内閣府から「SDGs未来都市」の選定を受け、今後の進捗及び評価については、SDGsの指標も加えて行うことで、第7次智頭町総合計画の将来像とSDGsの理念に近づいているかを可視化する。

## 2 進捗状況の検証

各所管課は、各事業のPDCAサイクルマネジメントを実践するため、「進行管理検証シート」を作成し、内部評価を実施。

これまで年度末に行っていた作業を前倒しし、中間検証用のシートを作成。次年度予算要求に向けたActionを明確化する。

## 3 進行管理検証シートの作成

中間検証用のシートを基に、年度末に前年度実績検証用として作成、評価する。

## 4 評価指標

評価については、第7次智頭町総合計画の将来像を達成しているかについて評価することとするが、個別の事業計画において目標値を設定している場合は、その目標値への達成度に鑑み、進行管理検証シートの「評価」欄に下記のとおりA～Eを選択した。

「将来像：一人ひとりの人生に寄り添えるまちへ」

評価	内容	達成度合
A	「将来像」に十分に達成している	100
B	「将来像」にかなり達成している	75
C	「将来像」に達成しつつある	50
D	「将来像」にあまり達成していない	25
E	「将来像」に達成していない	0

## I 森の恵みを活かしたまちづくり

全体的な評価としては、令和元年度にはゼロであった A「十分に達成」が5事業に増え、B「かなり達成」が12事業から23事業へ大きく増えていることで、事業の進捗が大きく図られたことがわかる。

これまで地道に継続してきた事業の認知度が上がり、多くの事業評価が C から B へステップアップしている傾向がある。

「仕事」を視点とする事業が多くを占めている中で、コロナ禍であっても持続可能な体制が維持できることを示している。

林業系事業においては、林道整備や地元市場への原木安定供給、低コスト林業や自伐林家育成事業などの取組が概ね予定どおり進められ、高い目標達成率となっている。

農業系事業においては、遊休農地対策や有害鳥獣対策はほぼ目標を達成した実績となっており、次年度におけるスマート農業導入や遊休農地対策パッケージ事業の推進、ジビエ政策の推進が期待される。また、本物の農産物供給体制事業においては、組織体制の強化と町内遊休農地を活用した中長期計画が進行中である。

まちづくり系事業においては、地域経済循環創造事業により「いのちね」のハード事業が完了し、今後福祉や雇用増加の面での成果が待たれる。一方でコロナ禍で疲弊する商店街への支援政策、コロナ後を見据えた観光政策の抜本的なテコ入れが今後の課題である。

環境整備の視点においては、計画的な地籍調査事業を進めつつ、セラピーロードや文化的景観などの資源を町内外へ効果的に周知し、受け入れることのできる体制やコンテンツの充実を図っていかなければならない。

SDGsのゴールとしては「No.8 働きがい」「No.15 陸の豊かさ」の設定が多く、智頭町における主要産業の農林業が抱える課題の解決と雇用とのつながりを創出することが重要な因子であることを示唆している。

I 森の恵みを活かしたまちづくり		目標への達成度(下段:令和元年度数値)				
		A 十分に達成	B かなり達成	C 達成しつつある	D あまり達成していない	E 達成していない
健康	智頭町ならではの自然やつながりで健康長寿な暮らし	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
仕事	受け継いできた仕事を活かし、新たなチャレンジを広げる	2 (0)	18 (9)	4 (16)	0 (2)	0 (0)
環境整備	町民の安心な暮らし・活動をささえるための、そして未来に受け継ぐ環境	3 (0)	4 (2)	0 (3)	0 (0)	0 (0)

## II 安全・安心に暮らせる健康長寿のまちづくり

全体的な評価としては、住民の生活に直結する情報、交通、生活インフラ整備、防災対策などの対策が大きく前進した年度であった。令和元年度 B・C 評価が中心であったものが、令和2年度には A・B 評価へステップアップしているのが明らかにわかる。

また、事業費用が大きく、政策として学校給食の無償化の実現、共助交通の体制づくり(地方創生事業)、行政手続きのスマート化や財産の適正管理など、住民の生活様式、行政様式の転換点を迎えている。

これまで総合計画の実施計画に明記されていなかった事業については、各所管課で見直し、新規事業として項目を追加している。

インフラ系事業においては、道路・橋梁整備事業や老朽化した水道施設等の更新、IP 告知端末の次世代機用アプリの開発、共助交通実証実験を行い、住民の生活基盤を整えた。次年度以降も計画的に継続していくべき事業である。

健康の視点においては、各種健診、相談事業、医療・看護体制の確保、高齢者対策事業など、従来から行っている事業の維持・継続を重点に行いつつ、「健康ちづ 21」などの計画に基づき行われる施策の恩恵が、有効且つ適正に住民に届くよう各部署、関係各機関と連携していかなければならない。

災害対策系事業においては、「支え愛マップ」や「智頭町防災ハザードマップ」の策定などの成果が見られ、今後は東部広域行政管理組合智頭出張所の移転を進めつつ、関係機関との災害対策体制の強化を進めて行く必要がある。

SDGsのゴールとしては、「No.3 健康と福祉」「No.11 住み続けられるまちづくり」の設定が多い。コロナ禍において、住民や民間、行政の活動は大きく制限され、様々な施策の中止や延期を余儀なくされている中で、住民の安全・安心な生活を守り、持続可能な社会を形成していく工夫が求められている。

また、「No.9 産業と技術革新」の設定もあり、今後 Society5.0 を見据えた行政サービスのスマート化、デジタルガバメントの構築を視野に入れた取り組みが全国的な潮流となることが予想される。

II 安全・安心に暮らせる健康長寿のまちづくり		目標への達成度(下段:令和元年度数値)				
		A	B	C	D	E
		十分に達成	かなり達成	達成しつつある	あまり達成していない	達成していない
健康	智頭町ならではの自然やつながりで健康長寿なくらし	2	17	2	0	0
		(0)	(6)	(11)	(0)	(0)
環境整備	町民の安心な暮らし・活動をささえるための、そして未来に受け継ぐ環境	9	7	2	0	0
		(0)	(6)	(6)	(2)	(0)

### Ⅲ 子どもから大人まで学びと成長のまちづくり

全体的な評価としては、4事業がA評価となり、昨年度C評価の事業の多くがB評価へとステップアップしている。新図書館の開館に向けた取り組みをとおして「学び」や「仲間づくり」の機運が高まった結果と思われる。

事業費用は他の基本理念と比較して少額であるものの、小中学生から高齢者まで多くの世代のプレイヤーの自発的な活動が展開されており、コロナ禍においても様々な工夫により事業が継続できている。

学校教育系事業においては、中学生のちづNEXTから百人委員会中学生バージョンへの展開や、GIGAスクール構想によるICT化、遠隔授業の模索など教育環境の変化に対応する取り組みが進んだ。特に保小中高PTA 連合主催での「教育を語る会」では、新図書館でワークショップを開催するなど、まちづくりの核となる施設への関心が高い結果が得られている。一方で智頭農林高等学校との連携については、各関係機関の連携による次年度以降の活性化が期待される。

生涯学習系事業においては、各地区拠点施設の指定管理化を進め、石谷家住宅や板井原集落などの文化財の維持管理を継続しているが、今後は文化的景観の価値を町内外へ発信し、地域の宝として守り続ける取り組みの推進が必要である。

仲間づくり系事業においては、百人委員会やゼロイチなど住民主体の取り組みが広く認知され、自走への道筋ができつつある。今後行政、民間と住民主体組織がパートナーシップを形成し、対等な立場で持続していくフェーズへ移行していく仕掛けが必要である。

新規事業として「SDGs推進事業」を追加し、未来都市として小中学生の学びへの取り入れ、住民への周知を進めて行く。

SDGsのゴールとしては、「No.4 質の高い教育」「No.11 住み続けられるまちづくり」が多く設定されている。新図書館を核とした学びと多世代交流の更なる促進が期待されるとともに、さまざまなチャレンジが具現化する環境づくりが求められる。

Ⅲ 子どもから大人まで学びと成長のまちづくり		目標への達成度(下段:令和元年度数値)				
		A	B	C	D	E
		十分に達成	かなり達成	達成しつ ある	あまり達成 していない	達成して いない
学び	生活の知恵から趣味や仕事まで、くらしを彩る学びを増やす	1 (0)	22 (13)	0 (10)	0 (1)	0 (0)
仕事	受け継いできた仕事を活かし、新たなチャレンジを広げる	1 (0)	0 (1)	0 (1)	0 (0)	0 (0)
仲間づくり	活動を広げる仲間づくり、小さなつながりを幾重に重ねるコミュニティ	2 (0)	4 (1)	4 (7)	0 (1)	0 (0)

#### IV 地域や家族のつながりでつくるまちづくり

全体的な評価としては、昨年度B・C評価主体であった事業が、A・B評価へステップアップしている。地域における様々な課題やニーズに応じる施策が制度として実現し、認知された結果といえる。

地方創生事業として新たに「ちづみちエリアリノベーション事業」「人と地域をつなぐまちのコイン導入事業」が加わった。また、新図書館建設事業は完了となった。

子育て系事業としては、在宅育児支援制度や通学支援制度、ファミリーサポートの充実など、子育て環境の整備が進んでおり、おせっかい奨学パッケージ事業が新たに制度化された。

セーフティネット系事業としては、低所得者対策事業や障がい者自立支援制度が充実しており、子どもの貧困対策事業や高齢者移送サービス事業などはニーズの高い事業となっている。

一方でコロナ禍の影響を受けた観光やまちづくりイベント系事業については、関係組織体制の強化と共に、時代や社会情勢に沿った事業展開が喫緊の課題である。

また、財政難における公民連携事業の積極的な検討及び実行については、庁内のコンセンサスと優先的検討規程の制定、スモールスタートでの実践が急がれる。

SDGsのゴールとしては、「No.11 住み続けられるまちづくり」「No.17 パートナーシップ」が主な設定になっている。子育てから高齢者福祉まで、あらゆる世代にとって住みよいまちとなるよう、行政の責務を果たさなければならないとともに、住民や民間とのパートナーシップを強固なものとする事が求められている。

地域や家族のつながりで共助を、行政や民間とのつながりで公助を実現し、智頭町で暮らし、働く全ての人たちがまちづくりを「自分ごと」として捉え、様々な施策で得られる絆や成果が循環するまちづくりを目指す。そうすることで「一人ひとりの人生に寄り添えるまち」が達成できる。

IV 地域や家族のつながりでつくるまちづくり		目標への達成度(下段:令和元年度数値)				
		A 十分に達成	B かなり達成	C 達成しつつある	D あまり達成していない	E 達成していない
家族	一人ひとりの個性を活かしながら支え、つながる家族	8	12	1	0	0
		(2)	(7)	(12)	(0)	(0)
仲間づくり	活動を広げる仲間づくり、小さなつながりを幾重に重ねるコミュニティ	4	5	3	0	0
		(0)	(2)	(6)	(2)	(0)
環境整備	町民の安心な暮らし・活動をささえるための、そして未来に受け継ぐ環境	2	3	0	0	0
		(0)	(1)	(2)	(2)	(0)